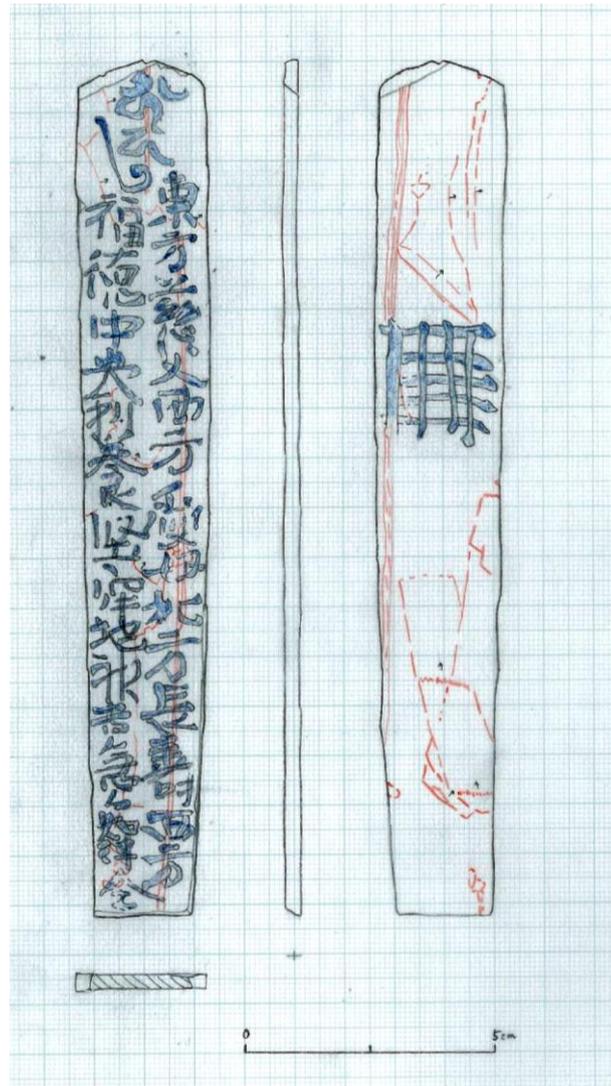


篠原東遺跡群現地説明会資料



2号木簡 (呪符木簡^{じゆふもつかん})

C地区出土)

縮尺 2 / 3

日時

平成 26 年 3 月 21 日 (祝) 10 : 00 ~

場所

糸島市篠原 (前原東土地地区画整理事業地内)

糸島市教育委員会

1. はじめに

篠原東遺跡群の発掘調査は、前原東土地区画整理事業に伴って実施しています。広大な面積を調査する必要があるため、平成 24 年度から平成 27 年度にかけて調査を行う予定です。

今回の現地説明会は、昨年(2022)の 12 月 8 日に行った現地説明会後の調査成果と新たに判明した内容について公開します。

2. 篠原東遺跡群 C 地区の調査

C 地区は、北東部に黄褐色粘質土おうかつしよくねんしつどの台地部分があり、西部から南部にかけては砂やレキ、粘質土ふしよくど、腐植土いくえなどが幾重にも堆積する沖積地たいせきとなつていまちゆうせきちす。中世の時期においては、弥生～古墳時代ごろに堆積したと考えられる暗灰色砂あんと暗灰色粘質土が生活面かいしよくとなつていますが、数十センチ掘り下げると水が湧くほど地下水位が高いため、あまり日常生活に向いた土地とは言えません。しかしながらこの豊富な水のお蔭かげで、木製品が腐らずくさに残っており、木簡もつかんや建物の柱など貴重な資料を発見することができました。

(1) 掘立柱建物ほったてばしらたてものについて

C 地区のほぼ中央部分くっさくに掘削された溝状遺構の東側には、多数の柱穴が掘られており、5軒けん以上の掘立柱建物が建つていたと考えられます。

このうちの 1 軒、SB01 では呪符木簡じゆふもつかん※と断面八角形の柱が発見されています。呪符木簡は、SB01 の北西角にある柱の根元近くから出土しており (P.9)、建物の着工時に行った地鎮じちんに際して埋められたものと考えられます。

このように、柱と木簡の双方が腐らず、残っている例はほとんど無く、また、戦国時代における建築儀礼けんちくぎらいを知る上で貴重な発見といえます。

続く八角形の柱は、建物東側中央にあり、柱の表面には製材時付いたと考えられるチョウナという道具こんせきの痕跡めいりょうが残っています。SB01 における他の柱の多くには樹皮がついたままとなつており、八角形の柱とは対照的な扱あつかいとなっています。

呪符木簡や八角形の柱などが出土したことから、SB01 は普通の住まいではなく、特別な用途の建物であった可能性があります。

(2) 木簡について (P. 11)

C地区では2枚の木簡が出土しています。このうち、1号木簡は溝状遺構から出土しました。頭と根元の部分に欠損がみられますが、他の部分は残りが比較的**良好**です。ただし、**墨書**は薄くなっており、肉眼では辛うじて読める程度となっています。片面のみにくずした文字が書かれています。

2号木簡は前述したSB01からの出土品です。作りが丁寧で、状態も非常に良く、肉眼でも文字がはっきりと読めます。表面には**梵字**と漢字、裏面には九字と呼ばれるまじない記号（縦線4本、横線5本からなる格子形の記号）が書かれています。梵字は不動明王「カーン」と降三世明王「ウン」を表していると考えられ、この下に東西北西（南の誤り）中央の方角と堅牢地神（土地の神様）を書き、最後は呪符の決まり文句である急々如律令で締め括っています。この2号木簡に書かれた内容は他に例がなく、珍しい発見といえます。

※【呪符木簡】とは まじないの文句を書いて立てかけたり、土中や水中に埋納するなど、何らかの信仰・呪術行為に用いられた木簡。

古代のみならず中世以降も存続し、現代の民俗事例もある。日本における木簡の使われ方を考える上で示唆する点が多い。（奈良文化財研究所ホームページ「木簡広場」から引用）

4. 篠原東遺跡群F地区の調査

F地区は、E地区の北側の調査になります（P.12）。E地区から続く谷部は東側へと向きを変えて延びており、西側丘陵上には、弥生時代前期末～中期初頭の貯蔵穴5基を検出しました（P.13）。貯蔵穴は、主に食料などを蓄えるために、地中に掘られた穴で、通常深さ2m近く掘られています。しかし、現状では深さ30～40cmしか残っていないため、本来高かった丘陵が大きく削られてしまったと考えられます。そして、この影響で、住居など比較的浅い遺構は消失したと推定されます。

4. 篠原東遺跡群D地区の調査（※当日の公開はありません）

D地区は全体的に遺構の残りが悪く、特に調査区の中央部分には遺構が存在しないため、かつての^{ほじょうせいび}圃場整備によって大きく削平を受けている可能性があります。

検出できた遺構としては、2本の溝と^{もっかん}堅穴住居状の遺構、木棺状の遺構があり、土器や木簡、ガラス小玉、^{こんどうせいわざ}金銅製飾り板、^{いた}竹籠^{たけかご}などが出土しました。

2本の溝のうち西側の方は、北東部でL字形に折れ曲がっており、屋敷等を^{ほり}囲む濠であった可能性があります。幅1～3mで、深さは50cm程度が残っていました。途中にテラスを持つため、2段掘りであった可能性があります。

木簡と竹籠が出土した土坑は調査区南端にあり、平面形態は不正円形で、最大径が6m程度、深さが約60cmです。最下層から竹で編んだ籠が、上面のテラス状になった部分から木簡が出土しています。

木棺は調査区北端で2基が検出されました。板材を組み合わせた構造で、内部からガラス小玉等が出土しています。ただし、土器等の出土がないため、正確な時期は分かりませんが、中世に属するものと考えられます。

(2) 木簡について (P.11)

D地区で出土した木簡(3号木簡)はC地区のものと比べると^{ぶあつ}分厚く、最も厚い部分で1.2cmあります。全体的に残りが悪く、上下左右すべての端部に欠損がみられます。文字は元々3行にわたって書かれていたと考えられますが、^{かる}辛うじて読めるのは中央と左側の2行のみで、中央に「前」、左側に「造所 九百三十五丁」の文字が残っています。

4. まとめ

今回の説明会では、弥生時代と戦国時代の遺構と遺物について紹介しました。弥生時代においては、糸島でほとんど類例のない貯蔵穴が検出され、この地域における穀物等の保管方法の1つが明らかとなりました。

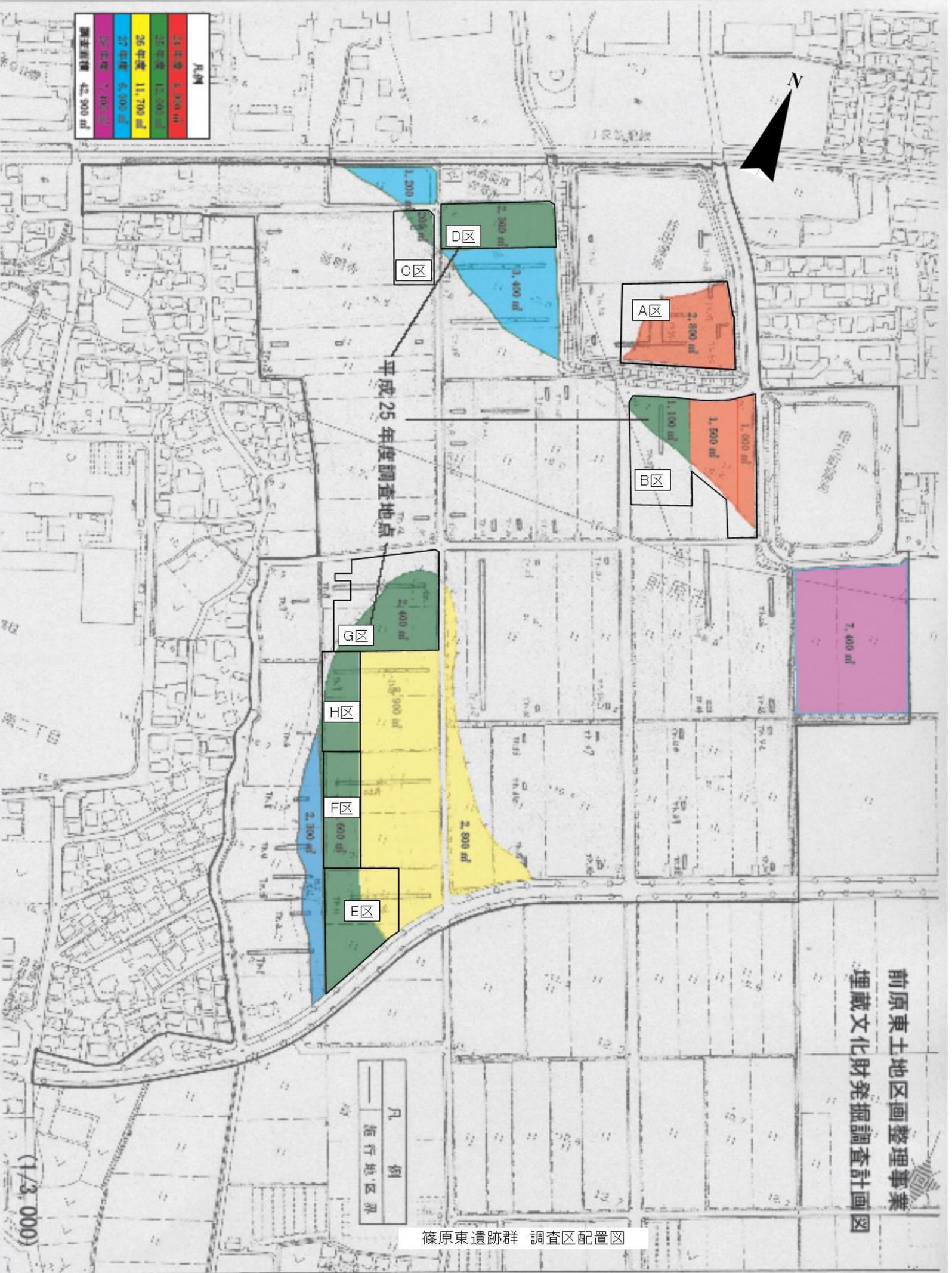
また、戦国時代としては^{とくしゅ}特殊な建物の発見や地鎮の姿を伝える木簡の出土がありました。

前原東土地区画事業を行っている場所は、過去にほとんど遺跡の調査が行

われてこなかった地域に当たりますが、今回の調査によって、地域の歴史が少しずつ明らかとなってきています。

【謝辞】 木簡の判読や赤外線写真撮影、八角形の柱等につきまして、次の皆様に貴重なご意見やご指導、ご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

東野治之氏（奈良大学）、渡辺晃宏氏（奈良文化財研究所）、野木雄大氏（福岡県世界遺産登録推進室）、塩屋勝利氏（元福岡市埋蔵文化財センター）、力武卓治氏・田上勇一郎氏・吉井康史氏（福岡市埋蔵文化財センター）、鈴木美奈都氏（松浦市教育委員会、h25.11まで篠原東遺跡群C地区現場担当）

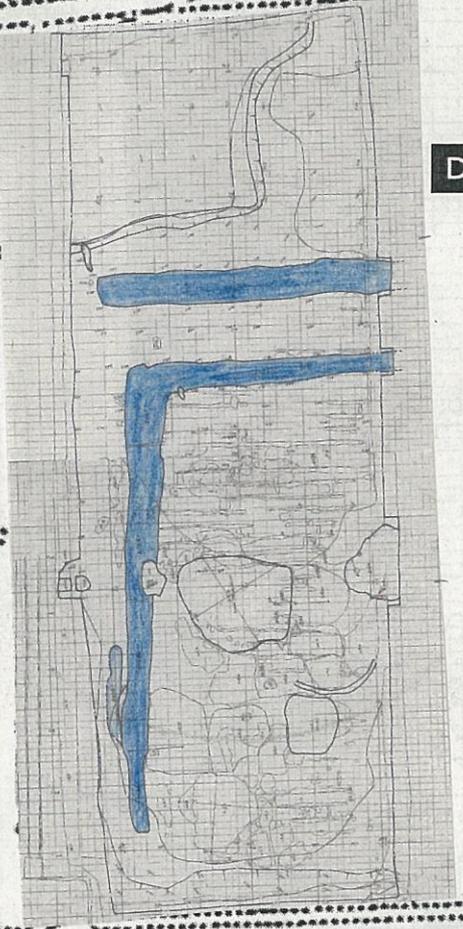
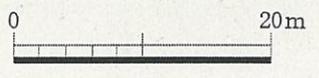
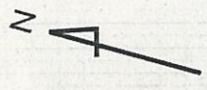


田邊池

原前前原
所露環

D区

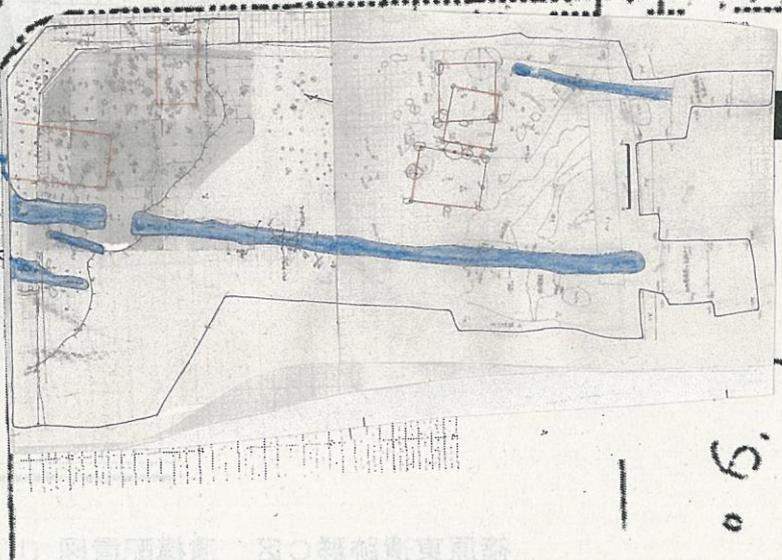
0.7.0



C区

溝状遺構

0.6.0



篠原東遺跡群C・D区 遺構配置図 (1/600)



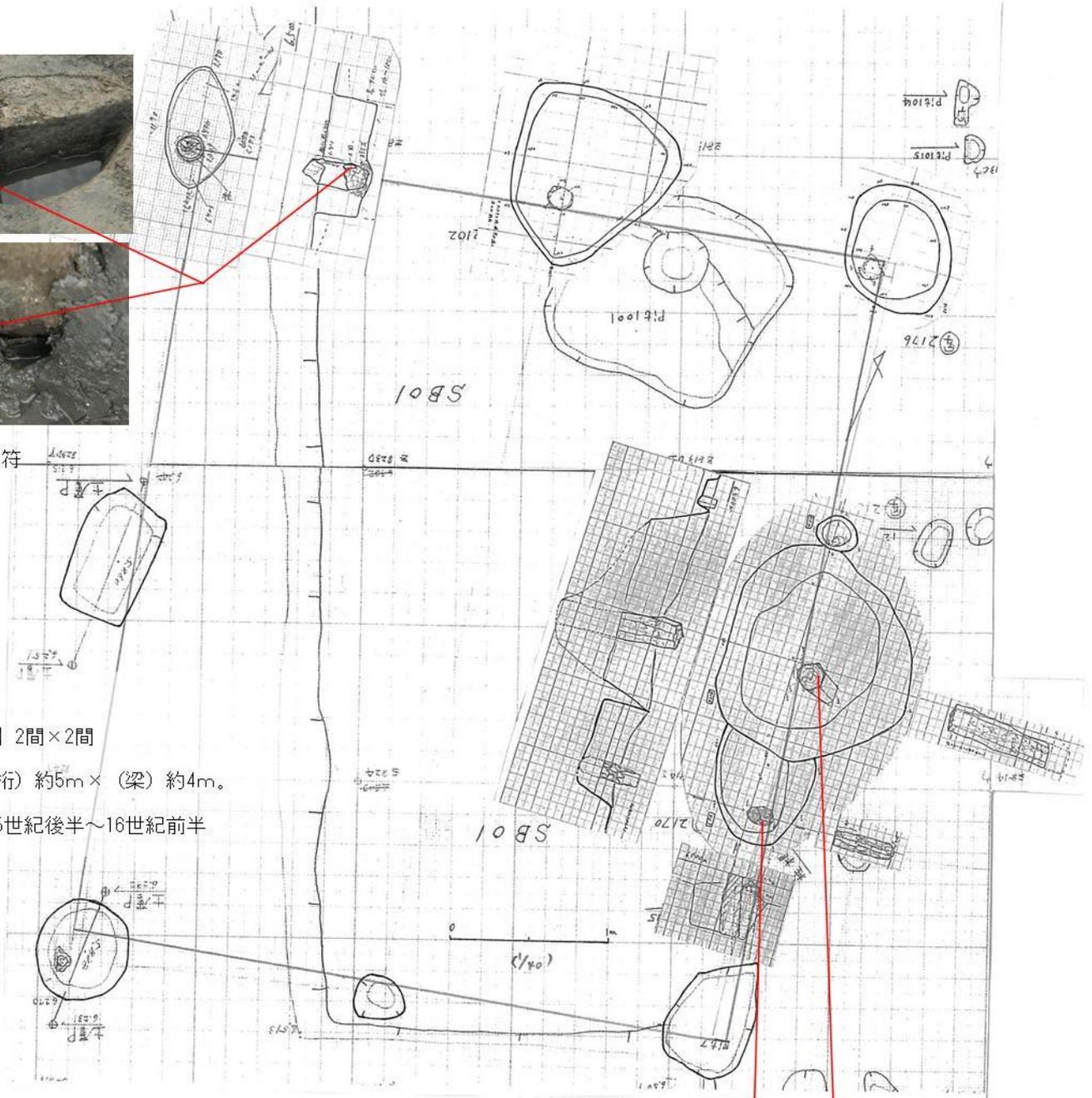
木簡② (呪符
木簡) 出土

Data

【平面形態】 2間×2間

【規模】 (桁) 約5m× (梁) 約4m。

【時期】 15世紀後半～16世紀前半



掘立柱建物の配置



断面八角形の柱 出土

篠原東遺跡群C地区 SB01実測図 (1/40)



木簡③ 出土



木棺検出状況



竹籠出土



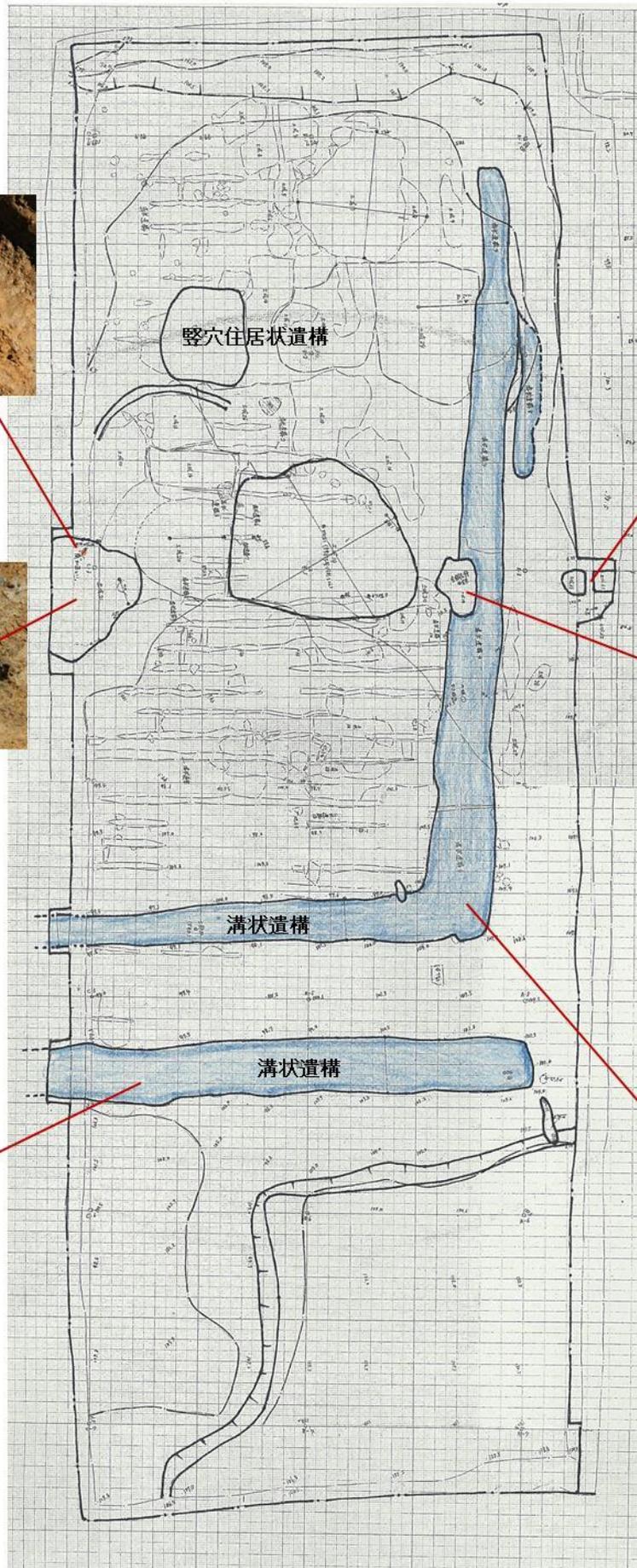
金銅製飾り板出土



直線状に掘られた溝



コーナー部分



篠原東遺跡群D地区全体図 (1/300)



篠原東遺跡群F地区 貯蔵穴 (2号貯蔵穴)



篠原東遺跡群F地区 貯蔵穴から土器が出土したようす
(3号貯蔵穴)

現地説明会資料は後日、糸島市文化課のホームページ内にて公開する
予定です。

カラー写真を掲載しておりますので、ぜひ、ご利用ください。

HPアドレス <https://www.city.itoshima.lg.jp/soshiki/33/>